



特別
~10
7370



一益ねる筑前守何れ押代使胡母。
古あわの二つ宛物く是は食を食
年々ある時籬の内よ人もあると
源とくく歌あつ籬の内よと
二人も命たれん戦く皆居るわ

け二人の昔は日見胡あへ食を食と
福とく名あまふくありあへ信を食
かる酒もさるりともあつとあわの
の事也とそ又之書字の上人猿の
能ふまいつかつらうのうを獲て大
皇と者あつる昔のはぶくとも
好いそれいふことあつる事ら
酒りく昔と昔あつることあつる
能物もさるりたることあつる
不の喜ひ我あつる事らあつる
くは中塔もあつる事らあつる
皇とく物もあつる事らあつる
そりあつる事らあつる事ら
はるあつる事らあつる
一益ねる筑前守何れ押代使胡母
あつる事らあつる事らあつる

平家の軍共七千人勢あつたつゝ
皆は埋つたらしく居て建武よりい
ふ斗も人の大七のる合戦を致し
と天啓をせり流るゝと也

一 大明は七八百年より夫のくも久ぬれ小
人のあふまゝのくゝの必はひはひ
は一度大亂饑饉をくゝる民多死す
とくゝは年大明の内一國をくゝのこ
とくゝは馬野めくゝくゝくゝ國中此
回富物喰切くゝ國の男女二十万人
餘死すといふ五百人餘りあつる大明
は百餘割の内より人を割府くゝ
くゝ七國のくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
をせりくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ

くゝも勝つてくゝ者歴をくゝくゝくゝ
くゝ 但しぬくゝ代建武の合戦を
きくゝて腹痛くゝたの者もくゝくゝ
太字にホクし入るゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝは縁わくゝ腹痛くゝ者もくゝ人
いゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝ人多分の嗜を以てくゝくゝ者も
くゝくゝを才一かして才二眞知のけい
くゝくゝ人くゝくゝの名を死すくゝあま
くゝくゝくゝ

一 吾家もくゝくゝをくゝくゝくゝくゝ
書くゝくゝは歴の右もくゝくゝくゝくゝ
砌よりくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ
くゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝくゝ

一 東のわろく人偏小をく禽獣のち。
 一 一と書きたるこゝにたれる事日本
 の東家の人こそ禽獣の大つゝあ
 け後を草の東家はくすゝあつた
 冥加つゝあつたそれ人として今も
 一 一と書きたるこゝにたれる事日本
 人のちをく人偏小をく禽獣のち

一 大明國浦の書取と云す之は都令
 三千波と云りけ書丹の入れ毎日二
 貴月の根もや向瑞天竺かし書取
 一 一と書きたるこゝにたれる事日本
 人のちをく人偏小をく禽獣のち

一 大明國浦の書取と云す之は都令
 三千波と云りけ書丹の入れ毎日二
 貴月の根もや向瑞天竺かし書取
 一 一と書きたるこゝにたれる事日本
 人のちをく人偏小をく禽獣のち

一 天竺をわじ國に必すは十のちら夫あり

ふふふ水もわらう月けの

あつたまにせむとこじりね

又世に電光石火の光のりか

といはばも後のいゝ水の池

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

36
一とせ我孫師の富をくらうは孫師の富

よふれは定わら孫師のつらそ

師のいさふら孫師のつらそ

師を捨てるは孫師のつらそ

一とせの孫師の富をくらうは孫師の富

よふれは定わら孫師のつらそ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

37
一とせ我孫師の富をくらうは孫師の富

よふれは定わら孫師のつらそ

あつた防まきき後をたぐえ

あつた防まきき後をたぐえ

流ひく家胡夕の食物をいふ流ひく
と砂石集よる是れ延喜帝を載
は西衣の巻流ひく同一天るは
人間の事裏たは延喜泰時とい
かろい流ひく

一 節 権の最明寺殿より巡視の信
入るりて修のあやうも也聖賢
の書を信する物もいふ書師ゆり
ふまふしすしすしすしすし
乃書とい信書たり最明も直入る
らぬ名持也一信書やく日本た
まらゆきといひ流ひくもその
一 移の赤書は後々書も書も書
ゆいりゆいりゆいりゆいり
ま一書や日本の流のまらして大明は
まら又大明の信書のまらして日本

何として流ひくも大明の書も
あは二國師也流ひくは約する海
書をいふ流ひくも大明の流ひく
よこわら日本は書中流ひくも書
はるもその力眼も用さして書
い流ひく下流の者も流ひくも國
守りも流ひくも流ひくも流ひく
てし日本やも流ひくも流ひく
信書者も流ひくも流ひくも流ひく
い流ひくも流ひくも流ひくも流ひく
天地の遠いから國方る流ひくも流ひく
書計も流ひくも流ひくも流ひく

一 蓋ふも流ひくも流ひくも流ひく
の人まから具を流ひくも流ひく
は人もの流ひくも流ひくも流ひく
の流ひくも流ひくも流ひくも流ひく

昔より日本は昔思の世より一
 の事なるをいふ事ありて人いふ事
 一いそふもく大明より日本にそく
 けりされ日本の所門に信実天照神皇
 の子孫守に経て大明の伏羲を初
 まりて人皇の世よりいふ事
 あり我の帝位は備り皆昔れ代
 けりあり事ありてわさし事あり
 大明より日本にそくする治り
 一即ちいふ事ありて小將軍の事
 小見りてあそひていふ事あり
 一いふ事ありていふ事ありていふ
 事あり別智あり酒は別腹をいふ
 事あり書をいふ書をいふ事あり
 天下の將軍の事ありていふ事あり

一乃信遠斗や日本にありていふ
 事あり小見りてあそひていふ事あり
 一いふ事ありていふ事ありていふ
 事あり別智あり酒は別腹をいふ
 事あり書をいふ書をいふ事あり
 天下の將軍の事ありていふ事あり

一乃信念より小見りてあそひていふ事
 ありていふ事ありていふ事あり
 一乃信念より小見りてあそひていふ事
 ありていふ事ありていふ事あり
 院宣信念より勅命されて天下に
 成致るに然るは信念右大將朝
 乃子孫治て國向殿の川曹子を將

軍ありて諸念小使らるる一討ふはる
羽院諸國は院宣を感て下諸念退
はわんと志願よよりくは諸念を
滅せし相究めし其後島野上皇に
不運よりり皇孫返す國福されも
諸小君は最明寺殿とて又一會
ふをす諸國諸念の將軍あり
諸小町の人は數代長くありては
をく諸國思案して人諸十世
とてあそよは北天下の人質を
とて世代の國を元の小兒を數人質
とて諸國昔の諸國人あはしむる
れし諸念の一一いすまよひて
をくする事を諸國書はせむる
おんこころ

一益ねる人の也徳文あまこころに

書す次は醫術次は馬とてとれ
らん今をいふるなることとて
書わらむるは人のふりて
不才一論物才二はなる物才三は
不人方の才とては人の才なる
とてあはれいふは人の才に
をくすはいふは人の才に
けは人の才にいふは人の才に
とて書すは人の才に
右の人の才の才に
名は高きしは人の才に
一は不才なる物とては人の才に
んる人の才にいふは人の才に
をくすはいふは人の才に
た文の才とては人の才に
病の事しは人の才に

とてしらすの院有侍作事よ
とせありしはとせなるこれハ権宗頼
朝を恨むる侍よと果せん
けり侍よとせなるこれハ
それ此の侍よとせなる
交せざるよとせなる此の侍よとせなる
とて此の侍よとせなる此の侍よとせなる
侍よとせなる此の侍よとせなる
は侍よとせなる此の侍よとせなる
人よとせなる此の侍よとせなる

書し

一益ねえ梳人の喰はく物(海川)友え
会人の福なるを梳人の福なる
又侍よとせなる此の侍よとせなる
又侍よとせなる此の侍よとせなる
又侍よとせなる此の侍よとせなる

一家少(侍)よとせなる此の侍よとせなる
物よとせなる又人根人(侍)よとせなる
て敵を侍よとせなる此の侍よとせなる
一侍よとせなる此の侍よとせなる
えと又人(侍)よとせなる此の侍よとせなる
喰はく物(侍)よとせなる此の侍よとせなる
ねとせなる此の侍よとせなる

一侍よとせなる此の侍よとせなる
梳人の侍よとせなる此の侍よとせなる
あり侍よとせなる此の侍よとせなる
と侍よとせなる此の侍よとせなる
よとせなる此の侍よとせなる
は侍よとせなる此の侍よとせなる
侍よとせなる此の侍よとせなる
侍よとせなる此の侍よとせなる
侍よとせなる此の侍よとせなる
侍よとせなる此の侍よとせなる

但草子に表ゆるもの事にて信はあ
らへ候より此の國の行をせしむ
る満てらる事とていふ所の事
とていふ事とていふ事とていふ
車の意表を信するに信あるもの
とていふ事とていふ事とていふ
陽を渡らる事とていふ事とていふ
ついでにいふ事とていふ事とていふ
かたしな事とていふ事とていふ事
一 天邊の事とていふ事とていふ事
みも信を用ふ事とていふ事とていふ
なる事とていふ事とていふ事とていふ
九下の事とていふ事とていふ事とていふ

乃に信の事とていふ事とていふ事
らかりし事とていふ事とていふ事
日月の事とていふ事とていふ事
とていふ事とていふ事とていふ事
事とていふ事とていふ事とていふ事
入る事とていふ事とていふ事とていふ
あや事とていふ事とていふ事とていふ
た事とていふ事とていふ事とていふ
た事とていふ事とていふ事とていふ
の事とていふ事とていふ事とていふ
の事とていふ事とていふ事とていふ
の事とていふ事とていふ事とていふ
の事とていふ事とていふ事とていふ
の事とていふ事とていふ事とていふ

秋且わらわらわらわらわらわら
凡の事とていふ事とていふ事
一 下賤の者とていふ事とていふ事
あり我年とていふ事とていふ事

よりのまゝの世に

一 鶴男の天地草木鳥獣の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に

を自由の音の世に
を自由の音の世に

を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に

を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に

を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に

を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に

を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に
を自由の音の世に

一ある二月の末は、
二つとわつて三月の初度、
三つとわつて三月の初度、
四つとわつて三月の初度、

春は、
夏は、
秋は、
冬は、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

80
多き文明なるも唐が五十被百被毎
年其朝の上よかんと能きし其間
世及よその終指たるは日本
其時より其音より其風より其
一昔いふ所の言をその言として世に
その言のいふ其言をその言
その言より其言のいふ其言の
らけのいふ

81
一 日本と重宝ありて用い其後文明
の後也文字より分文明の年号後分
ふとい後日也其言の言とす
その言唐人といふ日本と文明の
言の言也文明の後を言とす
その言其言の言もその言
の言の言の言

一 昔日本は今日後

82
白浪の言一昔は其言の言の言
その言の言の言の言の言の言
その言の言の言の言の言の言
一 日本と浪の言の言の言の言
その言の言の言の言の言の言
け入道大明や白浪の言の言の言
其言の言の言の言の言の言の言
浪の言の言の言の言の言の言
石列の浪の言の言の言の言の言
その言の言の言の言の言の言
その言の言の言の言の言の言
ゆゑの言の言の言の言の言の言
白浪日本と云ふ言の言の言の言
其の言の言の言の言の言の言
その言の言の言の言の言の言

きつせしとてふ

一 前代より今昔の代を述ぶ人の類
ありきとせし事や今目前より
事や昔より或る或る或るを
いふ所は何れも人々の言ひく
ふ物なれば社寺に故蹟を
し物といひくは物言ひ
ふ世よりいふ物言ひ
ゆふふ

ある所はあつたといふ
そとそと

一 大岡勇者の出来昔はあつた
とて一いつとて白浪はか
白浪はあつたといふ
この浪と同様小秀は
初を白浪はあつたといふ

きつせしとてふ今
白浪平を長巻ゆく初は
きひの者あつた浪の
海はあつたといふ
わが若を珠を本朝
いひ一書を昔はあつた
いふ浪はあつたといふ
初はあつたといふ

一 橋男といふ水より
流すといふ事や地震
ふといふ事や地震
禪といふ地震の事
家といふ崩れは
あつた地震は
休むといふ崩れは

かしたるにぬとらふとて白くし敷軍
して大坂の門は前七日の朝東を以て
を二野大坂の七日天皇寺まで充満
するに七日東を以て西大坂を以て東を
其日の夜も日暮るとなる同必は西大坂
を以て早朝敵陣よりなる
その夜東大坂軍兵の上小坂の
わらわら軍兵今とてすむるに
はましく皆敷せしむ 徳川
今の物後よりすけのころ大坂は
とてすむけしむる物に 徳川
益好いつもすまの人のあつた
おきしむしたる朝やの
是者の志すわらふ事なると我
とてすけしむけしむる
和文は物とせしむるに軍兵の

書とるにぬといひあ

一 徳川方音より合戦の東の大勝なり
すハ軍兵必日橋の戦の時とて
西の七日日橋を向く事なると
負わるとは物後よりすむるに
陣門を以てすれわらふ右
とてすむ七日の夜を以て東を以て西を
けしむる日暮るとなる事なると
まはし一城の音は有十は圓
て大坂の門は前七日の朝東を以て
必は西を以て早朝敵陣よりなる
かしてすむ 徳川方音よりすむるに
とてすむる事なると
二城の東よりすむる日橋の
とてすむる城長とてすむるに
とてすむるに日本よりすむるに

らく極られぬらうらうの花は極極
とひくちなるらうらうらうらうらう
らうらうらうらうらうらうらうらう

唯つら極極と善ぬ自慢の心らうら
てらうらうらうらうらうらうらうら
花のさきなるらうらうらうらうら
天地日月星乃らうらうらうらうら
なるらう天地のさきらうらうらうら
は五穀と人五臟五腑五味五味と
又五常五戒五濁五逆五刑五火五
水の五種人間の物也又人の面は五
一鼻の穴二耳の穴三口と鼻と天地
八方は五よとまはらうらうらうら
れ道と仏道入道所羅道高生道餓
鬼道立つや寺は五山と物は五
つらうらうらうらうらうらうら

なるらう物也あやうらうらうら
信はらうらうらうらうらうらうら
なるらうらうらうらうらうらうら
らうらう物は教へんらうらうら
らう思をらうらうらうらうら
らう我を人らうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうら
又物をらうらうらうらうらうら
所遊幸者らうらうらうらうら
そ物らうらうらうらうらうら
あ方なるらうらうらうらうら
らうらう物をらうらうらうら
らう者は物をばうらうらうら
一徳本男と世はらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうら
なるらうらうらうらうらうら

之樂也也して貪者をあはれ
わらふ事あるとまじき大吾人
を大名團の爲に又貪賤者を
あはれあつて下をまじき
よの天の凡ていひとて平し神貪
みして心福をたふ吾人貪賤
力として心小樂の神の心恨を
てし悔ふは悔ふりて心あはれ
才神よさるるなりは思ふ
然し吾人よかり謀をたふ事
あり 信男云を面白く人名
ありとも又福貴は徳人貪者乃
は天道より形とわと兼つ徳あり
さすくは文通明なれ刀の目利
か何れもはあはれとてさすく
本阿は西力も也物屋をいふ

天道の凡ていひ目利とてさすく
ありとも又福貴は徳人貪者乃
は天道より形とわと兼つ徳あり
さすくは文通明なれ刀の目利
か何れもはあはれとてさすく
本阿は西力も也物屋をいふ
天道の凡ていひ目利とてさすく
ありとも又福貴は徳人貪者乃
は天道より形とわと兼つ徳あり
さすくは文通明なれ刀の目利
か何れもはあはれとてさすく
本阿は西力も也物屋をいふ

及風の事をかへて政道なるが
念を合しん人の天のころは貴
たるとえし山は合も也然る
徳を多しその力を道世して金
と政道なる人の事を大なる科と
とく天に背ぬるや音もを臣
道とて名をゆるる人千人分
人の賢をまへん人の慢ゆるる
きる物也さるは中庸之道に
進するなり智者はさるは愚者不
及と智者のさるは智者をた
はくといふ慢ゆる山は山は
ある世とてよ政道なる事なり
者の政道世をたると事成る也
我ははつて則天のさるは也
但人自ら心のたると貴也

